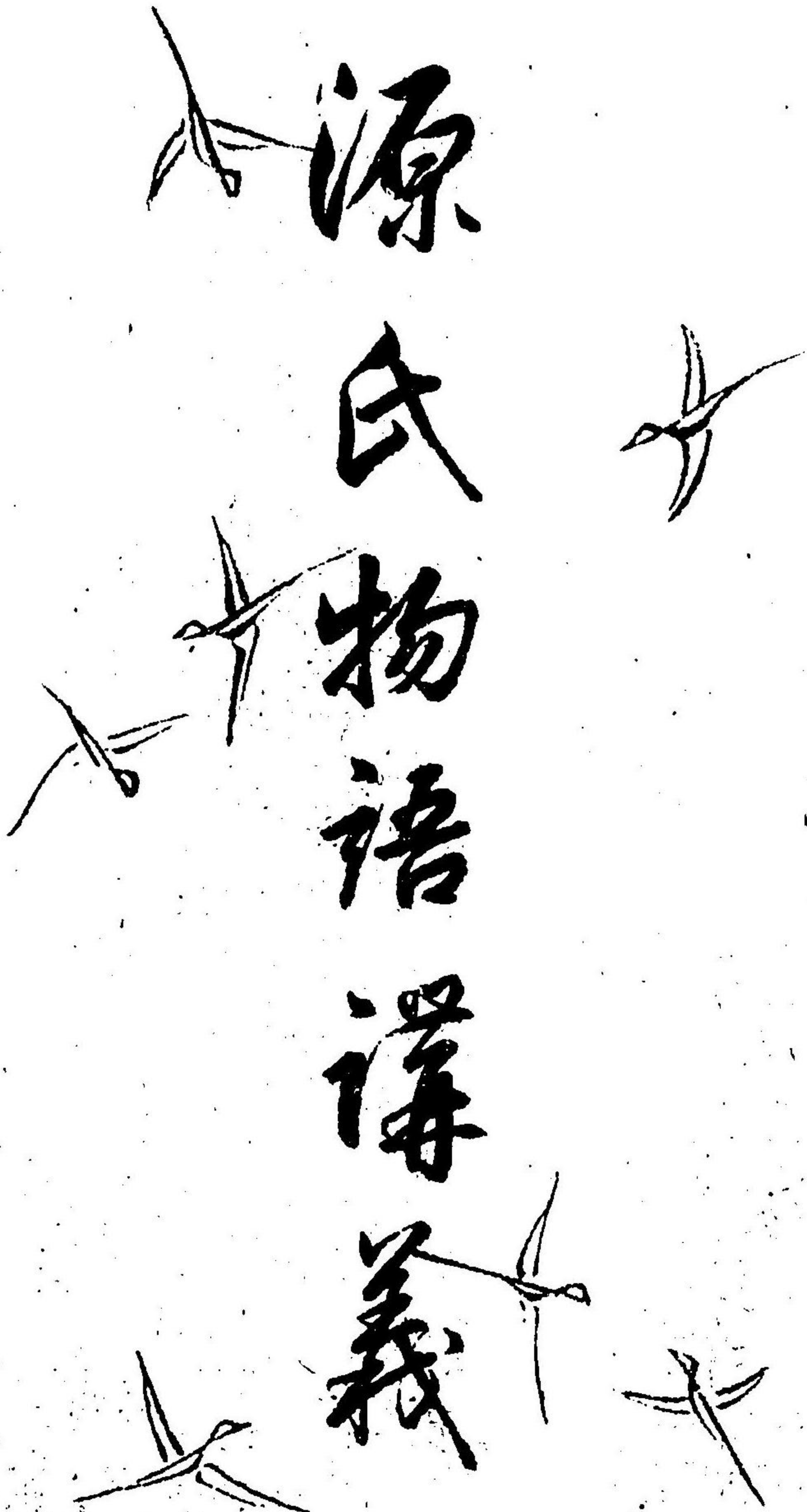


源氏物語講義



志川真頼大人校定
 鈴木弘基大人譯註
 小串権筆記
 板河氏
 藏板

空蟬の巻 九十一節 但帚木の巻の續きなり
 此巻ハ帚木の巻の末を切りつけて。一卷とあつてなれむ。上の第二大段四小段の續きなり。さきかくやくりちりり切りにけて。別巻となつたる作者の巻を帚木の巻尾に記せる愚考のめくたむべし。さきバこころも源氏十七歳中ねとゆへに時乃るまると上よ同し。福れをぬました。これハかく人よほまされても

空蟬の巻 九十一節 但帚木の巻の續きなり
 此巻ハ帚木の巻の末を切りつけて。一卷とあつてなれむ。上の第二大段四小段の續きなり。さきかくやくりちりり切りにけて。別巻となつたる作者の巻を帚木の巻尾に記せる愚考のめくたむべし。さきバこころも源氏十七歳中ねとゆへに時乃るまると上よ同し。福れをぬました。これハかく人よほまされても

源氏物語講義

うたせむ

一

志川真頼大人校定
 鈴木法基大人漢書
 小串隆家記
 板河氏
 義板

空蟬の巻
 此卷ハ、帚木の巻の末を切り引けて。一巻と志す。なれむ。上の第二大段四小段の續き。さきかくゆくりする切り引けて。別巻となす。作者のさき。帚木の巻尾に記せる。愚考のめくなく。さきかき。源氏十七歳。中福とす。一。時乃る。さき。と上よ。目。
 名つ。なす。
段落
 此巻の段落照度。さき。帚木の巻の。さき。かき。源氏十七歳。中福とす。一。時乃る。さき。と上よ。目。

空蟬の巻 九十一節 但帚木の巻の續きなり
 此卷ハ、帚木の巻の末を切り引けて。一巻と志す。なれむ。上の第二大段四小段の續き。さきかくゆくりする切り引けて。別巻となす。作者のさき。帚木の巻尾に記せる。愚考のめくなく。さきかき。源氏十七歳。中福とす。一。時乃る。さき。と上よ。目。
 福れ。かき。源氏十七歳。中福とす。一。時乃る。さき。と上よ。目。
 ち。さき。と上よ。目。
 ひ。さき。と上よ。目。
 そ。さき。と上よ。目。
 て。さき。と上よ。目。
 そ。さき。と上よ。目。

源氏物語講義

う。さき。と上よ。目。

つらひ致まのてし〇
あつぬさききり然
づき折之〇あつぬ
が便をせよ〇引つ
らひーレメントウ
四小ノ才六節

幼年すれど保のノッピ
キナラ又仰せられハ何
卒よきをりもあれ
一と括す〇〇引つ
らひーレメントウ
の引つらひカ葉ノ引
ふやひらき〇〇引つ
括せり入れのせよそ
のまゆみん〇〇引つ
を取して〇引つらひ
を幸よのまゆみん
まゆ〇引つらひのま
ゆ〇引つらひのまゆ
ゆ〇引つらひのまゆ

かひハ。うねはまじり^{四小段の才五節之原}
よそ。あつぬづらひ^{がまゆるりするあ}
乃さば御叙せり。さつぬまふぢよ。のねん
をりよの括す。よまの。のいひをりや
どして女とぢのど^{関腹}や。やまのたご
一げなるまふぢよ。の車よ^{まふぢ}めて^{ほのち}なるこのこ
もさぢねを^{先引}し。のるんとおぼせ。さのさ
えお^{先引}のむ。ま。りりけれを。つげま
あつぬづらひ^{中川のまふぢ}な。ぬちまふぢ。しそぢおんを
く^{中川のまふぢ}あつぬ。ひまふぢれて^{ほのち}あつぬ。まふぢ。
し。ハあつぬを。のぬん^{ほのち}な。まふぢ。まふぢ。

み人宿直の門番〇
見入せ〇引ひをり
せ〇〇引ひをり〇
引んが。のつらひ^東
の妻戸〇〇引ひをり
ま〇〇引ひ^{南の南の間}
〇〇引ひ^北
ま〇引ひ^{格子を敲き大声}
し〇〇引ひ^{細流云伊ふ介の女竹端}
疾之。おぼのまゆ子^{村家の西の方よま}
〇引ひ^西
四小ノ才七節
やまづッロく〇引
ふれ^{いざな}のまゆの
え〇引ひをり。か
う^{小君の}入つ。格
子^{〇引ひ}西^方

ほあそせ^{ほのち}づらひ^{ほのち}やま^{ほのち}。むん^{ほのち}が^{ほのち}の^{ほのち}つらひ^{ほのち}を^{ほのち}ま
りて^{ほのち}あつぬ^{ほのち}を^{ほのち}まふぢ^{ほのち}の^{ほのち}まふぢ^{ほのち}か^{ほのち}ら^{ほのち}した^{ほのち}まふぢ^{ほのち}
まふぢ^{ほのち}て^{ほのち}り^{ほのち}ぬ^{ほのち}まふぢ^{ほのち}あつぬ^{ほのち}ハ^{ほのち}な^{ほのち}り^{ほのち}と^{ほのち}い^{ほのち}か^{ほのち}さ^{ほのち}り^{ほのち}な^{ほのち}
ぞあつぬ^{ほのち}あつぬ^{ほのち}まふぢ^{ほのち}の^{ほのち}あつぬ^{ほのち}ハ^{ほのち}あつぬ^{ほのち}された^{ほのち}まふぢ^{ほのち}
バ^{ほのち}ひる^{ほのち}より^{ほのち}あつぬ^{ほのち}の^{ほのち}あつぬ^{ほのち}れ^{ほのち}り^{ほのち}せ^{ほのち}の^{ほのち}ひて^{ほのち}まふぢ^{ほのち}せ
な^{ほのち}あつぬ^{ほのち}まふぢ^{ほのち}四小段の才六節之。源小君よ源ひの
田^{ほのち}の^{ほのち}あつぬ^{ほのち}まふぢ^{ほのち}の^{ほのち}あつぬ^{ほのち}まふぢ^{ほのち}の^{ほのち}あつぬ^{ほのち}まふぢ^{ほのち}の^{ほのち}あつぬ^{ほのち}まふぢ^{ほのち}
り^{ほのち}なる^{ほのち}。さつぬ^{ほのち}む^{ほのち}む^{ほのち}ひ^{ほのち}む^{ほのち}ん^{ほのち}を^{ほのち}ら^{ほのち}を^{ほのち}や^{ほのち}と^{ほのち}あつぬ^{ほのち}ひて^{ほのち}。
やまづあつぬ^{ほのち}まふぢ^{ほのち}せ^{ほのち}ぢ^{ほのち}れ^{ほのち}の^{ほのち}まふぢ^{ほのち}まふぢ^{ほのち}より^{ほのち}れ^{ほのち}ぬ^{ほのち}。
らのりつるまふぢ^{ほのち}ハ^{ほのち}まふぢ^{ほのち}は^{ほのち}け^{ほのち}ぬ^{ほのち}ぢ^{ほのち}ひ^{ほのち}まふぢ^{ほのち}ぬ^{ほのち}。
よよりて。まふぢ^{ほのち}まふぢ^{ほのち}まふぢ^{ほのち}ハ^{ほのち}まふぢ^{ほのち}の^{ほのち}まふぢ^{ほのち}。

源氏物語講義

○かゝる御座りては
たゞかゝる御座りては
○かゝる御座りては
○かゝる御座りては
○かゝる御座りては
○かゝる御座りては
○かゝる御座りては
○かゝる御座りては
○かゝる御座りては
○かゝる御座りては
○かゝる御座りては

かゝる御座りては
かゝる御座りては
かゝる御座りては
かゝる御座りては
かゝる御座りては
かゝる御座りては
かゝる御座りては
かゝる御座りては
かゝる御座りては
かゝる御座りては

○かゝる御座りては
たゞかゝる御座りては
○かゝる御座りては
○かゝる御座りては
○かゝる御座りては
○かゝる御座りては
○かゝる御座りては
○かゝる御座りては
○かゝる御座りては
○かゝる御座りては

かゝる御座りては
かゝる御座りては
かゝる御座りては
かゝる御座りては
かゝる御座りては
かゝる御座りては
かゝる御座りては
かゝる御座りては
かゝる御座りては
かゝる御座りては

源氏物語講義

うたせ

中へ○チカをさすお
 一あつとちかきいしよ
 孝のあけさせ入
 戸あり○おいりも
 ごとく老の伊集
 家の箱はねる女房の
 うちちいり○おいり
 一しよ君のいり
 一とん○おいり
 ていりしよ老女賢
 がりてあのかあひ
 こころ○おいり
 ナナイと○おいり
 のおもと民部御評之
 女房のちいり○おいり
 いあひぬま
 いるいせいのすもぢヤ
 ナアとけいりあ
 らぬと○おいり
 いらぬ○おいり

ちかきいしよ
 孝のあけさせ入
 戸あり○おいりも
 ごとく老の伊集
 家の箱はねる女房の
 うちちいり○おいり
 一しよ君のいり
 一とん○おいり
 ていりしよ老女賢
 がりてあのかあひ
 こころ○おいり
 ナナイと○おいり
 のおもと民部御評之
 女房のちいり○おいり
 いあひぬま
 いるいせいのすもぢヤ
 ナアとけいりあ
 らぬと○おいり
 いらぬ○おいり

今ちちちちいひひ
 いしよのたけもい
 一民アと三三並ひのみ
 アアラウと○おいり
 へさげ押あへ返茶
 もさすいりて○お
 いひさひて「添付い
 ○おいり
 一「海老民那とひ
 て候はひそと初ん
 ○おいり
 のちちいり○おいり
 ちひれ「俗い
 一○おいり
 一上のりいりあて
 一○おいり
 一少の○おいり
 一「昨夜赤上と○おいり
 一ちいり○おいり

ちちちいひひ
 いしよのたけもい
 一民アと三三並ひのみ
 アアラウと○おいり
 へさげ押あへ返茶
 もさすいりて○お
 いひさひて「添付い
 ○おいり
 一「海老民那とひ
 て候はひそと初ん
 ○おいり
 のちちいり○おいり
 ちひれ「俗い
 一○おいり
 一上のりいりあて
 一○おいり
 一少の○おいり
 一「昨夜赤上と○おいり
 一ちいり○おいり

段の

是は比叡山の僧也。より末より元えより○かゝるもの難びる○もむのちる○尼はあて尋戒の験よ○今さんあまの仏のまゝ今ひ孫陀の未迎ありても残る念ありと○よりげは位尼君のうけはは位○かゝせきまむくよの尼はまむりせき直るくは○猶住たのよひりまむくひんといふ○九品上品上生なり、今こそあまの松のゆ光もむむくむむむむままよま特の相えと細

らんせゝるものかをり侍りなると御口を惜
せむくしむしひらじひらよのきるによみお
りてるんかくりりらむおまひんをるもの侍り
ぬれが今をんあまの仏のまひらつもひんま
た運ほぐまをむしむしてはひんをむく目ざり
おとつらかひらひらひらひらひらひらひら
こひらひらひらひらひらひらひらひらひらひら
つぱいと表よんちちららららららららららら
狩位にのくむむむむむむむむむむむむむむむ
志れのよみよむまむらむむむむむむむむむむ

流より○のひん
なるもの俗ろく
でずん人でもくせお
いぢりひ尼君のゆを
察してまむ○かひはよ
まむりマスグよえ
るものひんまむむむ
もれ母がどのひんま
まむひひらひらひら
ありとむまむむむ
あむむむむむむむ
掃まあむむ大切と
○かゝるものはむむ
之メツクニ○れむ
まぬむ既よ尼むらり
て侍たむ世と云○つ
まむらひひんまむむ
○あまむむむむむ
オとて母の父をこ
むむむむオとて母を

かき〜〜〜のむむむむむむむむむむむむむむむ
はむむむのむむむむむむむむむむむむむむむ
れむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
〜〜〜あむむむむむむむむむむむむむむむ
むむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
ろよはむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
むむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
はらんせむむむむむむむむむむむむむむむむむ
ひと表とむむむむむむむむむむむむむむむむむ
むむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ

源氏物語講義

難題の入りまをいひて
○別れありあれは別
限あれは○世にぬ
別引あり伊せ物物
よのやまをさくぬ別
のうらむみれぬ依れ
といひ人のよれた
め○心あまき取まり
○心あまき取まり
まきまき○げよま
たげよまき取まり
たひほどむひ考へ
てみれぬ○心ま
べたらぬ通例す
ぬ○別れ世にぬ
のいのは合と子供ら
あまき○心ま
―俗らちがあらぬ
といひま○心ま
はたれ―ちまきけ

養育
さくむ人あまきあるさくむ人あまき
くおもひむしがるまきまき
ひらきまきして後ひひらきありあれは
まきまきのまきまきとまきまきのまきまき
なほ久しうまきまきぬ時ひらきまきぬ
まきまきのまきまきぬ別れまきまき
まきまきのまきまきぬひひらきまき
まきまきのまきまきぬひひらきまき
まきまきのまきまきぬひひらきまき
まきまきのまきまきぬひひらきまき
まきまきのまきまきぬひひらきまき
まきまきのまきまきぬひひらきまき
まきまきのまきまきぬひひらきまき
まきまきのまきまきぬひひらきまき
まきまきのまきまきぬひひらきまき
まきまきのまきまきぬひひらきまき
まきまきのまきまきぬひひらきまき

泣きを垂るといふ
一ノ第四節
伊法まきまき伊法の
新ののまきまき
てん○心まきまき
物まきまき
日のくれまきまき
○ありつる扇先判の
扇まきまき
おまきまき
うらむ持刺したる人の
ほらまきまき
のうらむ書の潔た
○心まきまき
てはあまきまき
を夕白の花よた
てひひらきまき
まきまきのまきまき
まきまきのまきまき
まきまきのまきまき
まきまきのまきまき

一小段の第三節は源大貳の乳母の家を訪ひのひて。
尼まきまき家族は菊面―のひひらきまきまき叙せり。此の始は
尼まきまきとまきまきの子供も―とあるまきまき子供は
まきまき―とむひて―とあるひひらきの照子のまきまき
伊法まきまき―とむひて―とあるまきまき―とむひて
て。此のまきまき。惟光は志まきまき―とありつる扇は後
まきまき。ゆてまきまき―とありつる扇は後
まきまき。ゆてまきまき―とありつる扇は後
まきまき。ゆてまきまき―とありつる扇は後
まきまき。ゆてまきまき―とありつる扇は後
まきまき。ゆてまきまき―とありつる扇は後
まきまき。ゆてまきまき―とありつる扇は後
まきまき。ゆてまきまき―とありつる扇は後
まきまき。ゆてまきまき―とありつる扇は後
まきまき。ゆてまきまき―とありつる扇は後
まきまき。ゆてまきまき―とありつる扇は後
まきまき。ゆてまきまき―とありつる扇は後

のいひに
さうしてほろろ
さうしてほろろ
さうしてほろろ
さうしてほろろ
さうしてほろろ
さうしてほろろ
さうしてほろろ
さうしてほろろ
さうしてほろろ
さうしてほろろ
さうしてほろろ

三十一
伏筆

「中ぬらひ息あ
原をへまはり
りきりきり
あひはな
よて紫苑の花
たふぬ
ちとけぬ
さうしてほろ
心外
のさへ花ハ
朝ふゆハ
たりとてハ
ハ

「中ぬらひ息あ
原をへまはり
りきりきり
あひはな
よて紫苑の花
たふぬ
ちとけぬ
さうしてほろ
心外
のさへ花ハ
朝ふゆハ
たりとてハ
ハ

「中ぬらひ息あ
原をへまはり
りきりきり
あひはな
よて紫苑の花
たふぬ
ちとけぬ
さうしてほろ
心外
のさへ花ハ
朝ふゆハ
たりとてハ
ハ

つみりくせむ折
らでい過ずんま中
の今朝のうらぐら
顔と之〇朝方の面花
を女君よとりたる
りさハ朝方の晴るま
も物たけ舞のかけ
まよそハ女君よむま
めつらぬとつらま
〇おねやけどは
私のけさうをさ
主君のともあがりな
したといとんきつた
る中おの状之〇列
かく中お一げ侍童
の状の画はかきたみ
ゆま〇おまめま
ぬいよは露て原を
まのよ〇山が山
家入〇朝のうけ

のくれを中おかき

朝中お方ののくれを

とぬえつらぬとつらま

けさうをさ

主君のともあがりな

したといとんきつた

る中おの状之〇列

かく中お一げ侍童

の状の画はかきたみ

ゆま〇おまめま

ほの蔭を花よそて
いん古今亭よたき
まおいよ山がの花の
まげよやまめめめめ
一は側を打たへ
州とつらま〇ほ
ほど各も強〇か
いんちちを
ま〇或い又いふかひ
なるいなる女お味を
持てあへん〇お
してさうぬま
ま〇〇〇〇〇〇〇〇
ほののさ
まの物
まの情
粗略よ
れうちとけて

ほの蔭を花よそて
いん古今亭よたき
まおいよ山がの花の
まげよやまめめめめ
一は側を打たへ
州とつらま〇ほ
ほど各も強〇か
いんちちを
ま〇或い又いふかひ
なるいなる女お味を
持てあへん〇お
してさうぬま
ま〇〇〇〇〇〇〇〇
ほののさ
まの物
まの情
粗略よ
れうちとけて

いほほ
あうま
ら
て
い
の
ま
ひ
地
仲息
の
か

原式勿語講義

おま

十四

下之〇いざぎさくつゝ物
 下意がみんとてまよ
 のり右近の外の女
 房〇つうぎのうら
 めつさの石橋二夜
 の間はのけんと神の
 誓ひを夜廻く
 たりてと云と云語
 をえん杖橋いあへ
 ちの故よたれて
 後なりとよみみて女
 の知れてらはか〇
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか

〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか

〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか

〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか
 〇かとかとかとか

源氏物語講義

ゆゑに

十六

めいびと目醒て
 あ、甚きくよ
 りて田舎
 の通ひ
 行て商ひ
 どのの
 の北隣
 けて壁
 の中
 めの
 の○
 ひの天

月がげびおほなるいやははを
 るるひのらぬきまののちあ
 晴ちあくちるさるるさるるの
 あやしき夫をををを。あは
 いとをむ。
 きくね。
 そけれ。
 めめ。
 きあ。
 び。

おとすのう
 入るる
 消へた
 き住居
 との
 死
 ての
 がや
 物
 て赤面
 の
 入
 てる
 の
 破
 引
 上

えか
 どの
 きた
 上
 て
 り
 る
 ろ
 ち
 ら
 れ

のひびきいゝかきこひは
柄碓もすぢれぬら
びほの糸の縁音とらふ知
ぬらぬとらふ○あつた
の衣うつまは白樺の
衣○あつたのびかたま
とらふ衣れよたつた
まゝ○あつたとらふ
源と夕鳥と一ふま
○寝るまゝ庭の
狭まゝ○おれたら
れせぬ風致あるも
のぢれがぢやれたら
と云ふ○あつたの
まゝいゝまだまゝ源
の常は位のみぬら
くて壁の中よつた
時でも間違ふは
るをぢあつたまゝ
伊耳よつたあつた

のまゝいゝまだまゝ源
の常は位のみぬら
くて壁の中よつた
時でも間違ふは
るをぢあつたまゝ
伊耳よつたあつた

源氏物語の切なる
まゝいゝまだまゝ源
の常は位のみぬら
くて壁の中よつた
時でも間違ふは
るをぢあつたまゝ
伊耳よつたあつた

源氏物語の切なる
まゝいゝまだまゝ源
の常は位のみぬら
くて壁の中よつた
時でも間違ふは
るをぢあつたまゝ
伊耳よつたあつた

源氏物語講義

源氏物語

二十一

生取の多し白氏文集
 の七月七日長生殿夜
 半無人私語時、まの
 詩を引けるは、玄宗と
 楊貴妃の契り、ハホを
 とげされ、ハハ、ハハ、
 とん、〇ハハハ、ハハ、ハハ、
 みのまのハハハ、ハハ、ハハ、
 つゝまけられ、ハハ、ハハ、
 む、ハハ、ハハ、ハハ、ハハ、
 果してハハ、ハハ、ハハ、
 のみ、ハハ、ハハ、ハハ、

四小ノ才四節
 入方
 ちのけれ、ハハ、ハハ、
 〇ハハ、ハハ、ハハ、
 り、ハハ、ハハ、ハハ、
 〇ハハ、ハハ、ハハ、
 〇ハハ、ハハ、ハハ、
 〇ハハ、ハハ、ハハ、
 〇ハハ、ハハ、ハハ、

在天願作比翼鳥ト云
 ねをよはさんとはひきあへて、
 甚クグクシ
 の世の契、まのハハ、ハハ、ハハ、
 花、ハハ、ハハ、ハハ、ハハ、
 〇ハハ、ハハ、ハハ、ハハ、
 五條の晴の景況を叙せむ。
 月影の、
 不都合ノ時分
 〇ハハ、ハハ、ハハ、ハハ、
 〇ハハ、ハハ、ハハ、ハハ、
 〇ハハ、ハハ、ハハ、ハハ、

生取の多し白氏文集
 の七月七日長生殿夜
 半無人私語時、まの
 詩を引けるは、玄宗と
 楊貴妃の契り、ハホを
 とげされ、ハハ、ハハ、
 とん、〇ハハ、ハハ、ハハ、
 みのまのハハハ、ハハ、ハハ、
 つゝまけられ、ハハ、ハハ、
 む、ハハ、ハハ、ハハ、ハハ、
 果してハハ、ハハ、ハハ、
 のみ、ハハ、ハハ、ハハ、

四小ノ才四節
 入方
 ちのけれ、ハハ、ハハ、
 〇ハハ、ハハ、ハハ、
 り、ハハ、ハハ、ハハ、
 〇ハハ、ハハ、ハハ、
 〇ハハ、ハハ、ハハ、
 〇ハハ、ハハ、ハハ、
 〇ハハ、ハハ、ハハ、

在天願作比翼鳥ト云
 ねをよはさんとはひきあへて、
 甚クグクシ
 の世の契、まのハハ、ハハ、ハハ、
 花、ハハ、ハハ、ハハ、ハハ、
 〇ハハ、ハハ、ハハ、ハハ、
 五條の晴の景況を叙せむ。
 月影の、
 不都合ノ時分
 〇ハハ、ハハ、ハハ、ハハ、
 〇ハハ、ハハ、ハハ、ハハ、
 〇ハハ、ハハ、ハハ、ハハ、

れど〜〇江〇りつぐ
 まり〇ちび取接階
 の人三合びとと〇お
 きまら川と〇引あさ
 葉よ引ほものおきま
 か川ハ多えぬともえ
 一か〇らりよとまめ
 やはけあゆをともれ
 り川ハ近江の坂田那
 ありよはまの俗カイ
 ツブリト云をん

五小の二節

殿のいんどのい説も
 あり〇昔子ハ部屋を
 け曹子ハ孫の人の
 住め〇〇〇〇〇〇〇
 ちよのま〇〇〇〇〇〇
 の種字されどおハ
 乃のよより〇〇〇ハ
 原のをあ〇たよ
 今種面のを解きそ
 あり〇〇〇〇〇〇の
 書を〇〇〇〇〇〇
 より縁と〇〇〇〇
 むがママと〇〇〇の
 あり〇〇〇〇のあを
 うけでり〇〇〇〇
 て云々〇〇〇〇〇
 素類ハトウチヤと〇〇
 あり〇〇〇〇〇〇の
 まで〇〇〇〇〇〇故

ほのゆちびつぎせしきせしきせしきせしき
 ありひらちあをすまひきぬともるは旅ぬ
 おき川と契のさよりほあのもろ
 第一節のほまより下りぬひ目たくる程よおき
 起の景色をさど見えぬ目たくる程よおき
 ひく〇〇〇〇〇〇〇
 て人あを〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 ナツカシゲナキ
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

れど〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 あり〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 け曹子ハ孫の人の
 住め〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 ちよのま〇〇〇〇〇〇〇〇
 の種字されどおハ
 乃のよより〇〇〇ハ
 原のをあ〇たよ
 今種面のを解きそ
 あり〇〇〇〇〇〇の
 書を〇〇〇〇〇〇
 より縁と〇〇〇〇
 むがママと〇〇〇の
 あり〇〇〇〇のあを
 うけでり〇〇〇〇
 て云々〇〇〇〇〇
 素類ハトウチヤと〇〇
 あり〇〇〇〇〇〇の
 まで〇〇〇〇〇〇故

離口をあらく〇おほ
 ちてまめれは離口
 のたぎやんやう近
 へ紙燭をよめてま
 とん〇おほちのち
 もえまゝぬつてま
 一ちの離口の平者
 源のほ前近くさ
 まるゝものぬれ
 く慎一も長押を
 〇おほちのひて礼
 儀をさだむ時よ
 〇おほちのひて
 とまえるせぬ火の光
 よつきて変化のま
 りおほちのひて
 よんえたるは遊あそびなる

もあゝぬちあふれたいらりりたる人よ
鬼者のしげられぬなありとせんシカタノナキ
 らちのこもきこもるぬちほらぬら
 くべらたはあひおびおぼせは結構をひき
 ませたまはもてあれたのぬれ創ツネるぬとよ
 ちのこもきこもるぬちほらぬら
浮舟のぼるぬちほらぬらぬちほらぬら
 とせぬ召ませぬ枕こころのこころのこころ
 よあゝみこし召こころのこころのこころ
 せぬ五小段の才四節の夜景及び夕白の

六小才一節
 寛平は皇京極内息
 不と河原院よお
 けり融公の意なく
 引きりされどこれ
 た昔物傳はか
 のよあひまき
 〇たひ
 入れたるくちを
 めりたまえ〇出
 とあまのちあれは
 〇

卒去一は我を叙せる是を一大段の五小段と
 け段の何がの地まで夕白のうせのふぬかを叙せり
 らぬちのこもきこもるぬちほらぬらぬちほらぬら
 のよあひまき〇たひ〇たひ〇たひ
 せぬ〇たひ〇たひ〇たひ〇たひ〇たひ〇たひ〇たひ
 まくどたひひえよおえりて息ハヤク絶
 まるゝものぬれぬちほらぬらぬちほらぬら
 いひあられぬちほらぬらぬちほらぬらぬちほらぬら
 かゝるゝものぬれぬちほらぬらぬちほらぬらぬちほらぬら
 れど原たひたひたひたひたひたひたひたひたひたひ

い〜目入哀し〜を
い〜○かんでんの
南殿ハ茶宸敷ハ何ガ
ーのお〜ハ貞信公
ハ貞信公ハ茶宸敷よ
て、鬼の出たを、おな
やけの物定めよとさ
だめよ〜人〜
ハ何物ぞ〜とて
太刀引ぬま〜これガ
もを〜ハせよ〜
けれハ〜ハせよ〜
あち〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜

い〜ひ〜な〜りぬ〜を〜ひ〜ん〜ひ〜ひ〜い〜さ〜
て〜い〜い〜さ〜を〜あ〜の〜き〜み〜い〜き〜い〜そ〜の〜い〜い〜い〜い〜
め〜い〜せ〜ひ〜と〜との〜人〜ど〜能〜え〜り〜り〜な〜れ〜は〜け
た〜鳥〜の〜せ〜う〜ま〜き
を〜ひ〜の〜し〜く〜ぬ〜ゆ〜右〜近〜ハ〜た〜ぐ〜あ〜る〜む〜づ〜あ〜し
と〜ひ〜ひ〜け〜ら〜ち〜れ〜さ〜め〜て〜な〜ら〜む〜い〜ひ〜ひ〜あ〜い〜ど
い〜し〜か〜んで〜ん〜の〜ぬ〜れ〜た〜ま〜ら〜の〜ぬ〜さ〜ぶ〜を〜あ〜び
ま〜ら〜た〜ま〜を〜あ〜ね〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜
り〜ぬ〜い〜い〜し〜き〜よ〜ぬ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜
ギヤウサニナ
ど〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜ろ〜
急〜
た〜た〜た〜た〜た〜た〜た〜た〜た〜た〜た〜た〜た〜た〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜

い〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜
〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜

い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜

源氏物語講義

ゆゑか

六小段の第一節
之の驚き

あり物とべし
六小節二節

風やありしつら

比上の五小段第四節

風まよ一打あまた

よこぬやまを人の樹の

ひかり夜のやけあけ

まはれしつら

まはれしつら

からしつら

あらびたの聲はつら

ゆのまひさつら

ゆのまひさつら

あつらつら

あつらつら

あつらつら

あつらつら

あつらつら

あつらつら

あつらつら

あつらつら

あつらつら

あつらつら

ひまよりよるの
おちりぬすまの
たてをこぼれしつら

吹たふしはまのたれつら
シツカハツマ

まはれしつら
格 声

いふくみまのたれつら
鼻

うさぎのたれつら
たれつら

うさぎのたれつら
たれつら

うさぎのたれつら
たれつら

うさぎのたれつら
たれつら

うさぎのたれつら
たれつら

うさぎのたれつら
たれつら

うさぎのたれつら
たれつら

うさぎのたれつら
たれつら

うさぎのたれつら
たれつら

うさぎのたれつら
たれつら

うさぎのたれつら
たれつら

うさぎのたれつら
たれつら

うさぎのたれつら
たれつら

うさぎのたれつら
たれつら

うさぎのたれつら
たれつら

うさぎのたれつら
たれつら

うさぎのたれつら
たれつら

うさぎのたれつら
たれつら

くはりておもひ
しほくえ夜もあけん
とてさるゝとてつらきとてらん
も静まり〜とて海さ
てつらの静まり〜とて
けて又次このこゝを
思ひおのひかきぬら
こまおのひさるゝとて
あひこよ〜味さひて
えさるゝ〜○あり〜
て「かろ〜とてさるゝと
あり〜とのさるゝと
〜とて」

六小の才三節

のらう〜とて性光云
に源の宿あひのひ
〜とて性光のらう〜と
まへにたれさるゝと
めてた〜源の恨み
のふさまたもるゝと

むく〜。かくま〜^{前後のまゝの例}さるゝのな〜とてなり
ぬ〜^{カクニサセ}さるゝのふ〜とてか
くれな〜^{四種}とてをを〜とて
人のあ〜^{ナマイキノ童}の〜^ロはさるゝ
よぬ〜^{ナカラシキ}とてさるゝ
と〜^縁とておぼ〜^{六小段の才ニ}
おぼ〜。さるゝ〜とて性光の宿あ〜とてさるゝ
あ〜^息とてさるゝ。は〜とてさるゝ。今
夜〜^息とてさるゝ。あ〜^息とてさるゝ。
憎〜^{モロヤツパリ}とてさるゝ。さるゝとてさるゝ。さるゝとてさるゝ。

〜^{ハリアトナキニ}とてさるゝ。さるゝとてさるゝ。さるゝとてさるゝ。
知〜^{ナソットニ}とてさるゝ。さるゝとてさるゝ。さるゝとてさるゝ。
近〜^{大夫性光}とてさるゝ。さるゝとてさるゝ。さるゝとてさるゝ。
お〜^泣とてさるゝ。さるゝとてさるゝ。さるゝとてさるゝ。
ひ〜^{カニコガリ}とてさるゝ。さるゝとてさるゝ。さるゝとてさるゝ。
性光の〜^{右近}とてさるゝ。さるゝとてさるゝ。さるゝとてさるゝ。
れ〜^{暫時}とてさるゝ。さるゝとてさるゝ。さるゝとてさるゝ。
お〜^涙とてさるゝ。さるゝとてさるゝ。さるゝとてさるゝ。
さ〜^{シシダワイ}とてさるゝ。さるゝとてさるゝ。さるゝとてさるゝ。
お〜^餘とてさるゝ。さるゝとてさるゝ。さるゝとてさるゝ。
あ〜^{ニハカ}とてさるゝ。さるゝとてさるゝ。さるゝとてさるゝ。
と〜^{誦經ノ}とてさるゝ。さるゝとてさるゝ。さるゝとてさるゝ。

まて比叡山のくん
 毛よそ所園梨叡山
 の僧ちまことちりれた
 り○あひて倒さる
 夕白の上よひあひて
 遠倒るざのよとあひて
 〇あひのれも
 よくとさるまゝ惟光
 も深のほのふさうそで
 夢をたさくかひひに
 きたるたまふん〇あひ
 泣くまゝ河海まゝか
 あれど引あふあふ
 六小ノ第四節
 出りてまゝ小帯よ
 必しも上ようくもま
 するくもいふ何ととあ
 り、解釈ま下のなひじ
 うりけれへ係る文法と
 あまに二祝ともあた

んとてあざり物せまといひやうつをとのめ
まさふ 惟光 頌
 あよめる山くまありのぼりまけりまがいにあづ
珍事
 らのたまよとももゆるうれ。ひて倒さるべ
 りちれめのせさせめひもゆるんほろ
 のりしそそちまひひあひまをーげよらう
シラ
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
惟光
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
六小段の才三節へ 惟光
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
年をさうしてゐる
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
別で功者かゝる人
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
ほろちを惟光
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 りりけれいづらなむもさるまゝとちまて。しそ

らじ、あひ文を省ける
 よて惟光深のほのふ
 てまてあまよひま
 考まごちをさめたけ
 れさしてかやうのを
 りよ、年うちねびた
 る人まゝとらあま
 〇あひんがれまゝ
 遠入り〇山寺と山
 寺い死人をあつあま
 多けれがめだつと
 〇あひまゝ
 惟光のまゝ〇あ
 〇あひの女房
 〇あひの女房
 〇あひの女房
 〇あひの女房

んあまかたけれどこのほりちまもまのせむ
ツガフナル
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
たさ
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
係と
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
眷 属 へ後類をいふ
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
ほろ
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
ドウシテ
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
惟光
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
タ鳥の宿 故郷
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
咎
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
里
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
編
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 まゝに居ゆるんを山まを終るやうあひの

伝性光が父の乳母な
 り女の手をて尾よ
 するて任たまふ○こ
 つばくみてはるか
 海よ後舞のあそび
 刺ふれはまき舞か
 志し川のつらつら
 まであひまけのま
 とありつらつら
 くの夜あれと肺説
 を身つたむんづむ
 い縮むとあそび
 とさうー○あひま
 園之四方とあそび
 さあそびりあふ○あ
 むーろは性光夕白
 をまよ抱くい恐あ
 あり是よつこ抱
 まて車よのせまふ○
 きたくあふーは俗

づのうゆまきまののせまふと侍らめと
 おひまひしてむろー女房のあまよえ
 使むんづの山のいんよろーそまろ
 ン性光がちれおまのめれよよそく
 のいんづんてまき侍らあひいん
 まげまきろよ侍れどろとあまよ侍らま
 えそあひまらるる種れまきれは馬車よん
 人をえいひまらるるまろけむろはむまろ
 ーくみて性光のせまふとまろやろ
 とまきまかろらろらまらまらまら
 疎
 カハユラシゲ
 ナヒサヤカ

シツカリトモとら
 夕白の髪のもは庭よ
 りあふたふ○あ
 くれまひては
 降自もくれ惑ひのふ
 外よ○あひま
 夜あけて人の強あぬ
 うちよ夕白をか
 ちん送ると性光
 かりあふ○有
 つて右近を夕白は
 て車よまきまふ○
 引れはあひま
 歩行しては性光
 の裾のくまを引上

えせのびづのあひまのたふまめ
 ひてあまらうとあまらうとあまらうと
 海をうんとおぼせと馬よて二条の池
 おまらまらまら人まらまら侍らまら
 まら右近をまらてのまらまらまらまら
 て性光のあまらまらまらまらまらまら
 半分のあまらまらまらまらまらまら
 れど性光のいんまらまらまらまらまら
 てはよ君まらまらまらまらまらまら
 まらまらまらまらまらまらまらまら
 の六小段の舟四節え夕白
 の屍を山寺へ送り源ハ

いふ所なり○さ
 可なり中おまか
 とて又立ゆり
 て○いふは行觸
 へ行先して穢ま
 たる○たがおぼ
 ぬけみひおぼ
 けさ織○りこ
 そたつて○甚痛
 心よゆるとのま
 本居翁がたみの
 又忘々の字音の
 とあるは何事も
 佛説たつてハ
 の力を略きた
 りりて説つる○
 義人の辨中おぼ
 のふゆゑは共ま
 義人の赤ま真実
 一勅使のつら

くめいあましせのひして希のけいあしき
 きとたえのひして内中お相いりあす
 おれよかくらせよふぞや律ののりせのふ
 こそまともおひひらひとりあよ係むぬ
 うちつがれのひして相あくこあまを
 おぼえぬけみひよふれたまをささ
 いとをまゐりてつれといのふ
 のうちよはいひひるくあめいを
 よほく係あもやま人三アヒハスけれたまふめか
 せのらび義人の辨をせよ真まのや
 よかるとをさ奏せ左大寺の奏の上のうか
 りりてえまぬ係せう息そといのふ
 段の第二節之源痛哭の二内裡より勅使ありて源
 の安吾をとりせり大板の公あち訪ひ状あり
 日十七日くれて性光まれりかるけひ何りとの
 多あひてあぬ人もれちあらあらあらあ
 づれ人げあらせて性をほつほつほつほ
 ちとちとてほやとのふままよ袖をほのほよ
 おあそなまのかれのかたいいいいい
 あまりよこそい物のあめれながいところか
 りほらんもむんさまやあらん日吉よらいく侍

○かゝるをさ
 かくるありて云
 とつづれはさ
 れのいふ
 一ノオ三節
 かくるけつひら
 人げのいふは
 性光と密のよとを
 講りる人とて
 ゆまふれよとせ
 て人を速がけ
 さす○今いとみ
 をつづれよとや蘇
 まあつとつと
 るのいふ○あ
 まいふ山の尼が住
 むよ夕鳥の屍を
 おのりもる部を
 ばつ○あ
 ともかくのいふ

いふ所なり○さ
 可なり中おまか
 とて又立ゆり
 て○いふは行觸
 へ行先して穢ま
 たる○たがおぼ
 ぬけみひおぼ
 けさ織○りこ
 そたつて○甚痛
 心よゆるとのま
 本居翁がたみの
 又忘々の字音の
 とあるは何事も
 佛説たつてハ
 の力を略きた
 りりて説つる○
 義人の辨中おぼ
 のふゆゑは共ま
 義人の赤ま真実
 一勅使のつら

あつ「夕鳥の死相の
存生の時と云ふ」
と〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
「あつと云ふは
赤穂の〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
あつぬは大徳なち
原をか夕鳥をいれ
とんち〇〇〇〇〇〇〇〇
まをんて表れと思
てれてはたまへ〇
り〇二条池へのの
へど右近を二条池へ
あれと云ふ〇〇〇〇
〇年ごろまゝ〇〇〇〇
右近ハ夕鳥のをま
きけより片時を離
れ別れ仕まつし
を信し別れてゆは
ゆらんちち歎く

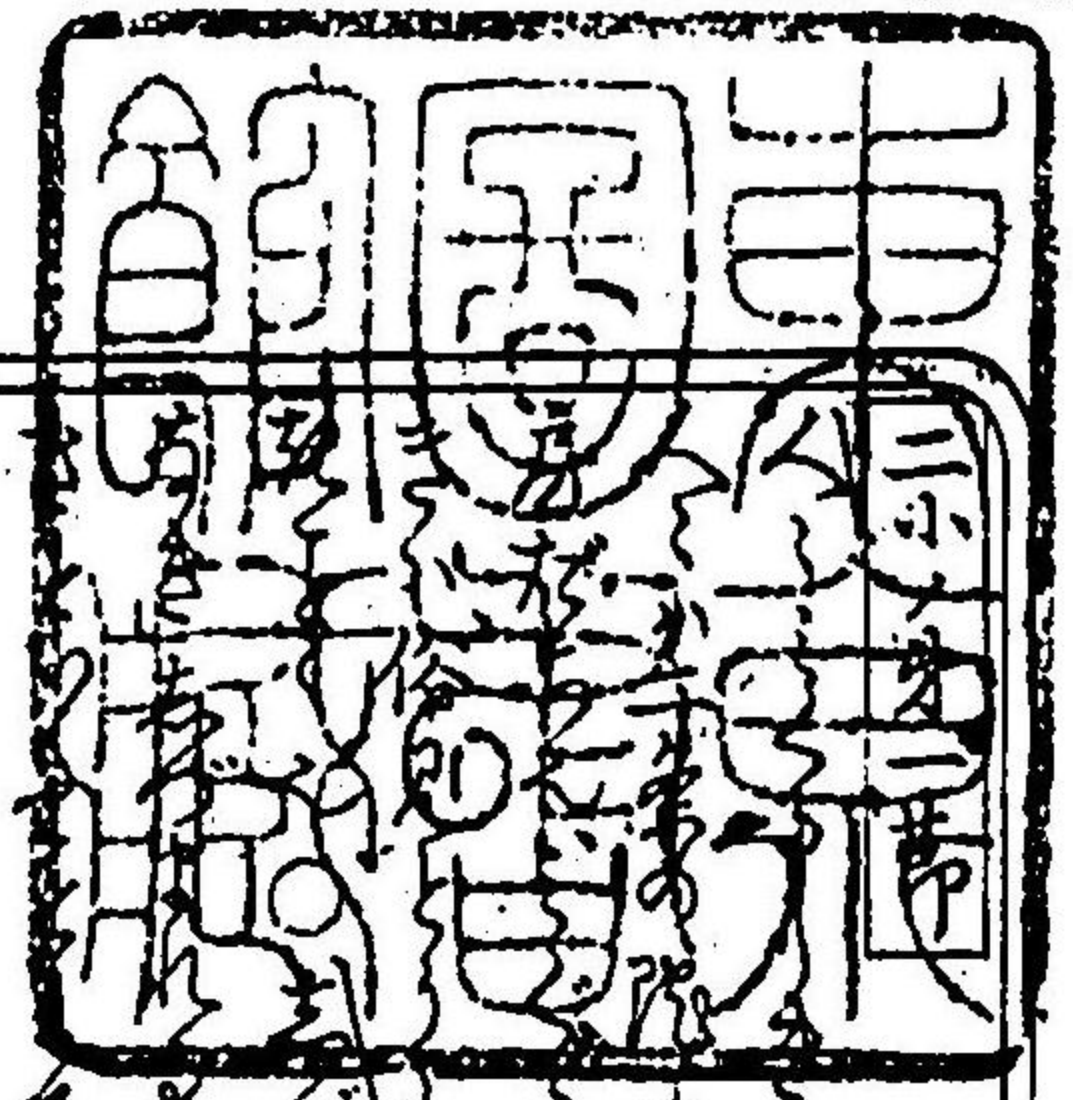
うたふまぢ。夕鳥の死相の
あつと云ふは
あつぬは大徳なち
原をか夕鳥をいれ
とんち〇〇〇〇〇〇〇〇
まをんて表れと思
てれてはたまへ〇
り〇二条池へのの
へど右近を二条池へ
あれと云ふ〇〇〇〇
〇年ごろまゝ〇〇〇〇
右近ハ夕鳥のをま
きけより片時を離
れ別れ仕まつし
を信し別れてゆは
ゆらんちち歎く

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
あつと云ふは
あつぬは大徳なち
原をか夕鳥をいれ
とんち〇〇〇〇〇〇〇〇
まをんて表れと思
てれてはたまへ〇
り〇二条池へのの
へど右近を二条池へ
あれと云ふ〇〇〇〇
〇年ごろまゝ〇〇〇〇
右近ハ夕鳥のをま
きけより片時を離
れ別れ仕まつし
を信し別れてゆは
ゆらんちち歎く

れそまして。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
あつと云ふは
あつぬは大徳なち
原をか夕鳥をいれ
とんち〇〇〇〇〇〇〇〇
まをんて表れと思
てれてはたまへ〇
り〇二条池へのの
へど右近を二条池へ
あれと云ふ〇〇〇〇
〇年ごろまゝ〇〇〇〇
右近ハ夕鳥のをま
きけより片時を離
れ別れ仕まつし
を信し別れてゆは
ゆらんちち歎く

ものごとくおぼしめされ
○せいのしんがらふに
きよほげふひとたひ
夕白の辰をふんよゆ
んとこのしんがらふに
○川のあまよふまを
あしひて怪光流の
さまをたて途方よ
くれて取敢へばま
洗ひて清水の観音
を念ふなるさまを
これ今ふひハ十七日の
夜こそ観音の縁日
されたる○世のま
あひてまよふま一
は観音を念ふまの
○又とくくたまひ
られのひて怪光よ
とやうたまひられ
てゆりのしんがらふ

てふきあひいて。清の観音をぬんたまり
たかまぐさくおひまぶらまをまひて
ころをおさして。らのうちよ佛をぬんたまり
ひて。又とくくまをけられひてさる。二条院
へくひり寝ひたる』 一小段の身六節之。深痛哭の六
ふたつて。馬よりまぶら。深ちのふ状え。を中を
二段段の一小段とて。廿段ハ皆深の泣哭きのさま
え。さく身四節。赤山へゆふら。たけあつた
のまを光多くみえて。人のけをひかまげうりけとあ
ふい。まよひハ観音の縁日されたる。縁日なる
ハ。十七日の月知てと云ふ。まよふまをさして。廿六
節まで。怪光お川あよてまをあひて。清の観音を
念ふたまりて。まよふまを念ふ。まよふまを念ふ
を念ふたまりて。まよふまを念ふ。まよふまを念ふ
されたる。まよふまを念ふ。まよふまを念ふ。まよふまを念ふ



三つて
あつてぬらとらふ
ほろの○まよふま
ふーひひぬらとらふ
昨日までぬらとらふ
まよふまのぬらとらふ
あつてぬらとらふ
まよふまのぬらとらふ
あつてぬらとらふ
まよふまのぬらとらふ
あつてぬらとらふ
まよふまのぬらとらふ

よく透るる文を廻したるまよふま。あけてもあま
ぬ行文へ。まよふまのあま。まよふまを念ふま。
あやまらぬまよふま。あま。まよふま。まよふま。
まよふまのぬらとらふ。まよふまのぬらとらふ。
まよふまのぬらとらふ。まよふまのぬらとらふ。
まよふまのぬらとらふ。まよふまのぬらとらふ。
まよふまのぬらとらふ。まよふまのぬらとらふ。
まよふまのぬらとらふ。まよふまのぬらとらふ。
まよふまのぬらとらふ。まよふまのぬらとらふ。
まよふまのぬらとらふ。まよふまのぬらとらふ。
まよふまのぬらとらふ。まよふまのぬらとらふ。
まよふまのぬらとらふ。まよふまのぬらとらふ。
まよふまのぬらとらふ。まよふまのぬらとらふ。
まよふまのぬらとらふ。まよふまのぬらとらふ。
まよふまのぬらとらふ。まよふまのぬらとらふ。
まよふまのぬらとらふ。まよふまのぬらとらふ。
まよふまのぬらとらふ。まよふまのぬらとらふ。

ろむまゝに、さしづめ
 たぐぬ様い言ひし
 せん〇たぐぬまゝ「養育
 ひる」て「別様よひひ
 て」〇さしづめ「ひ
 ま」に「夕白の方よま
 したれかまづあり」とは
 玉髪をそいでつゝ人な
 しくと、西京の乳母の
 家より「さしづめ」に
 〇一〇は「床のつゝと
 外ぐれのまづりある
 ま」を「さしづめ」の
 赤く「さしづめ」の物
 表すものなる「さしづ
 りだ」て「床のつゝと
 〇一〇は「さしづめ」を
 ひひひひひひひひひひ

〇一〇は「さしづめ」を
 素外におの「さしづめ」
 と「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の
 中より「さしづめ」と和名抄
 は「さしづめ」の「さしづ
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし

〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし

〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし
 〇一〇は「さしづめ」の「さし

源氏物語講義

つゝと

ハ六道のうち何道の
善道に赴くを
とぞ侍らん

四小の才二節

あつたがほのやどり
よい夕鳥のおのり
ハ夕鳥ハ何より行は
ひぬらんとあひ感ふ
とん〇げさひきま
のりよち〇きハ確トハ
おれぬいせうをわす
てさうさうらほのま
よみとひきまのま
秋之〇〇〇〇〇〇
の子どろもまじり
領の子共さうの夕鳥
を益で所帯おほ怖
憚りてあつてあり
たもよと疑ふおん
〇〇〇〇〇〇〇〇

怖テ開カセ玉ハ又
おぢてうちを
法會を比較山の法華堂
よて行ゆる事を叙せり。あれ夕鳥の
いづのよとひきま
ゆえに右近おほ
ちぢかあ

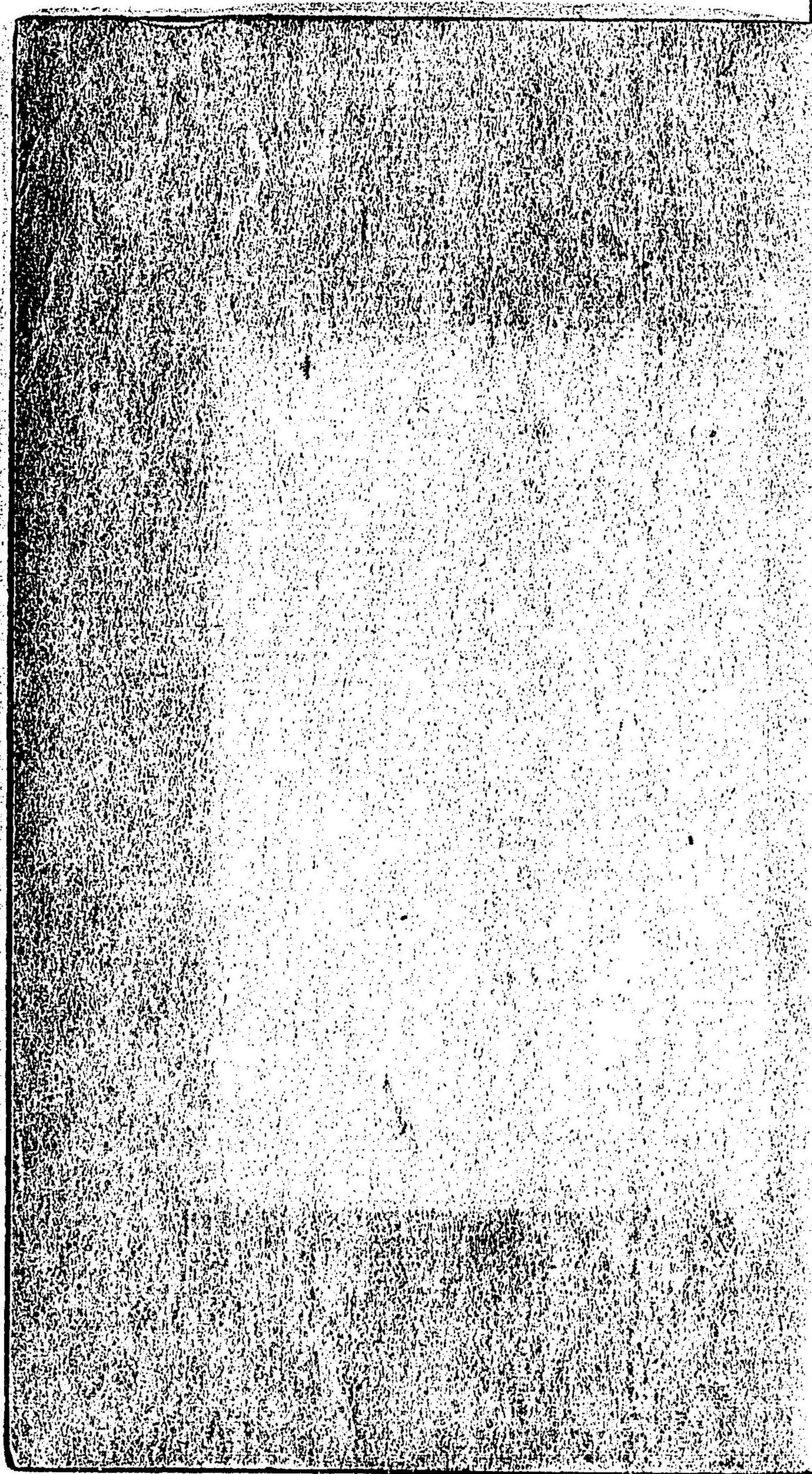
りよち〇きハ確トハ
性光ハ
好色トせん
夕鳥の
率
おぢのま

ラシキハ〇〇の
むきせ西家の乳母
ち揚名介の妻の女
〇お近ハ人右近ハ
別の乳母の子ハ〇
ヤカマシツロハ
みれんとををれ
ひてん〇〇
さむさむ玉鬘の
行方も知ぬ月日
みせを
の兼翌夜ハ〇
〇〇〇
別荘の
よとハ
女のと

もよとをひきまの
おれめのよの
て右近ハ人
まのせぬ
おほ
えまの
いよよ
トちぢ
らそひ

源氏物語講義

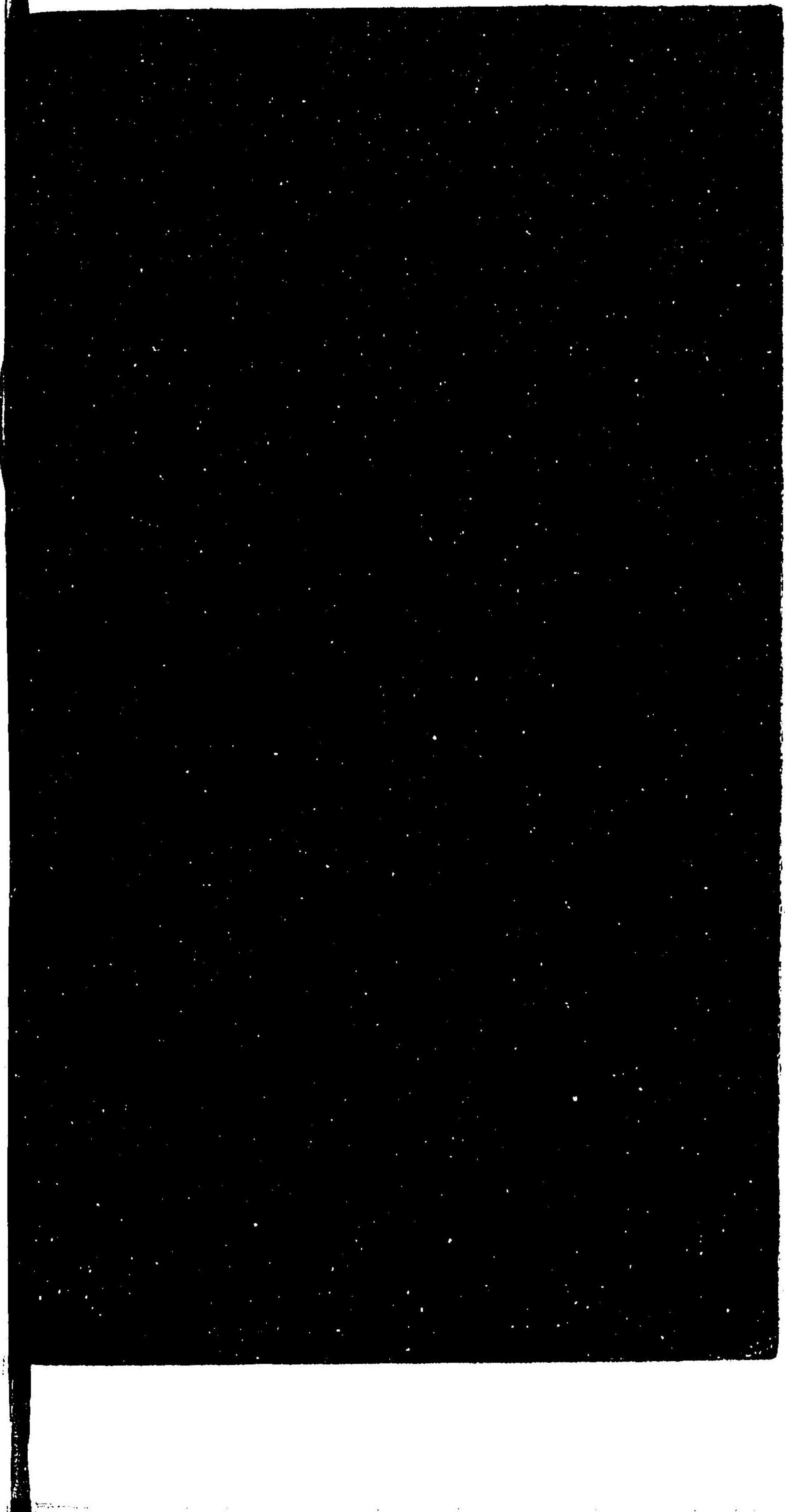
源氏物語



夕顔の巻終

夕顔の巻終

夕顔の巻終



特40

148

